

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎



ドイツ・デュッセルドルフ



2000年6月9日、私はドイツ・デュッセルドルフを代表するホール、トーンハレの舞台上に立っていました。第3回クララ・シューマン国際ピアノコンクールで、3次予選を経て決勝に進出した3人のうち、最後の演奏者でした。この地にゆかりの深いロベルト・シューマン（クララの夫）のロマンチズムあふれるピアノ協奏曲。曲が進むにつれてホールを埋めた聴衆の集中力と作品に宿る静かな熱狂が高まっていくのを感じながら、1週間に及んだ戦いが思い出されました。これで終わる！最後の和音を渾身の力で響かせた瞬間、地鳴りのような喝采に包まれ、勝ると確信しました。神戸大学の4年生になり、私は将来の夢のために音楽の道を断つ選択を迫られていました。しかしこのままでは終われない。どうせなら最高峰の音楽家に評価してもらい、最後の花道にしようと臨んだ初渡欧でした。その日の深夜に発表された結果は、1位なしの第3位……。あっけない幕切れで、きつねにつままれ

音楽家人生の原点刻んだ地

たような思いでした。表彰式の間じゅう気持ちのやりどころがなく、ホールの外でどろどろしている雷鳴がうっすらと記憶に残っているだけ。この結果の意味を理解するには、当時の私では年齢も経験も若すぎました。

特別審査員に世界的ピアニスト、マルタ・アルゲリッチさんが来席。シューマンのピアノ協奏曲

は彼女の十八番で、式典の後、「良かったわよ。でも、もっと速くも良かったわ」と投げ掛けてくださった一言は、彼女だからこそ発せられるもの。1世紀にひとりかもしれない天才が、人生の酸いも甘いもかみ分け、幾度となく舞台上で弾いてきた作品なのです。

ロシアのサンクトペテルブルクで音楽祭に出演して日本への途に

つくも、デュッセルドルフに思い残したものが何かあるような気がして、コンクールの賞金をドイツ行きのフライトに変えました。コンクール期間中はデュッセルドルフの隣町メーアブッシュで、ドイツ人家庭のお世話になりました。彼らは私を再び受け入れてくれ、深い森に抱かれた家で、しばらくの間、彼らと静かな生活を送

りました。日本語から離れてみるだけで、今まで意識に入ってた音が心地よく、言葉の中に宿る響きが音楽として聞こえてくるようになりました。デュッセルドルフが生んだ詩人ハインリヒ・ハイネの「麗しの5月、すべてのつぼみははじけるように咲く頃」という詩をドイツ語で教わり、この詩が用いられているシューマンの歌曲に息づくドイツの自然と叙情を実感しました。この時期ならではの白アスパラガスも忘れられず、溶かしバターの香りは私のタイムトラベラー。

国際コンクールにはホストファミリー制度を取るところがありません。イタリアやオランダでもそうした家族の出会いがあり、今でも会員制交流サイト（SNS）で交流しています。クリスマスにはカードが届き、コンサートがあるたびに友達と聴きに連れてくれます。音楽が広げてくれた友人の輪が、ヨーロッパで思いがけない展開を見せるようになりますが、話はゆつくりと進めていきましょう。



世界的ピアニストのマルタ・アルゲリッチさんと、赤松林太郎さん（右）いずれも2000年、ドイツ・デュッセルドルフ（筆者提供）
①ライン川に面した広場で、休日を楽しむ市民

国内外で活躍するピアニスト赤松林太郎さん（42）神戸市が、現在を見つめつつ、音楽を通して出会った人々や、訪れた街、歴史の魅力をつづります。

◇第2月曜に掲載します。

あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

